

実践3 「寝てるだけだと思っよ」

概要 一人の子どもの蝶への興味が、友達や学級の人々に広がり、観察を楽しみ興味を深め、やがて命と向き合う体験をします。子どもたちが、友達や保育者と考え合いながら、蝶の死をゆっくり受け入れていきます。

ポイント 保育者は、A児の育ちを見守り、とことん一人一人の感じ方や考え方に寄り添い共感し、答えや結果を急がない関わりを積み重ねています。また、観察しやすい飼育ケースを提示したり、学級の話し合いや生き物との関わりでの学びの過程を可視化したりなど、子どもの理解を踏まえた環境の工夫をして、「科学する心」の育ちを支えています。

千葉大学教育学部附属幼稚園

5歳児

Aさんは、学級の中で発言力があり、遊びをリードすることが多い活発な子どもである。気の合う友達と誘い合い、リレーや鬼ごっこなどの体を動かす遊びをしたり、虫を捕まえたりすることを楽しんでた。しかし、捕まえた虫を籠に入れたまま死なせてしまったり、「もういない」と逃がしてしまったりする姿が担任は気になっていた。虫を捕まえることが楽しいと感じているAさんに、「虫を捕まえる楽しさ」以外に、「虫の命」「命の循環」「飼育する面白さ」といった要素をどこまで経験することが必要なのか、悩んでいた。

場面1：幼虫との出会いから羽化まで…5月上旬～下旬

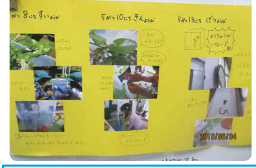
- 5月上旬、ミカンの葉に幼虫が付いていることに気づいたAさん。Aさんはどのようにして飼う状態を作るか、Bさんと話していた。「このままじゃお腹空いちゃう」と幼虫がいたミカンの枝を切り落として空き容器に入れ観察する。
- その後毎日、子どもたちは登園すると幼虫を観察するようになっていった。特にAさんは、この幼虫との出会いから虫探しに夢中になった。
- Cさんも、毎日観察している子どもの一人。翌週のこと、「ねえ先生、ここにおしっこしてるよ！今まではころころウンチだけだったのに…」と、気づく。担任が、「本当だ、おしっこみたいだね」と言うと、Cさんは、「うん、なんか緩いウンチとおしっこ一緒に出た感じだね。僕もそういう時ある」と言う。担任は、「(笑い)アハハ…そういう時あるよねえ」などと、気づきを受け止め、共感した。Cさんは、その後も幼虫が水分を出す様子に注視して観察していた。
- 5月中旬、蛹になったことを子どもたちが、気づき、じっと見つめていた。そして、1週間後、さらに蛹が黒味を帯びてきたことにAさんが気づき、「黒くなってる！もうすぐだ」「すごいねえ、黒くなっているね」などと言う。
- 5月下旬の朝、とうとう蝶が生まれた。Aさんは駆け寄ると、「やった、生まれた！本当にチョウチョだった！」と笑顔で担任に伝える。「お花、取ってくる！」「僕も行く！」とBさんと共に、園庭へと向かう。

保育者の援助と環境構成

- 自分なりにそのモノとじっくり関わることのできる時間や場の保障。
- 発見したことの受け止め、より見やすくするための用具の提示。



- 子どもの発見や考えに共感する。
- 子どもの想像する時間を保障し、答えに導こうとしない。



- 子どもの感情の揺れにつき合う。
- 答えに導こうとしない。



- 一番愛着をもって関わってきたA児の思いを受け止める。
- 子どもたち一人一人からでてきた意見を整理していく。

場面2：「まだ生きてるよ」6月

- 羽化した蝶を、今後どうしていきたいか話し合っていた頃。子どもたちが登園すると、蝶が死んでいる。ずっと大切にしてきたAさんは、一瞬ハツとなるも、そっと手を伸ばして触ってみる。じっと見ながら蝶の様子を観察する。「ちょっと弱くなっちゃっているね」と、担任が呟くと、周りにいたDさんがハツとして近づいてきて、「えっ、どれどれ?!」と言う。Cさん、「あー本当だ…死んでる。お墓に入れた方がいいよ」などと、聞きつけた子どもたちが、どんどん集まってくる。Aさんは、何も言わず、そっと足を触る。担任：「うーん、どうしようかな…」 Aさん：「多分さ、それ寝てるだけだと思っよ！そういう虫いるし！じゃ、お外に行ってきたまーす！」そうすると園庭へ飛び出していく。
- 保育者は、降園活動時、「チョウチョのことなんだけど…」と、話し合う時間を作る Bさん：「死んじやった!」、Eさん：「えっ、嘘、知らなかった…」 Aさん：「まだ生きてるよ！だって動いたもん」、担任：「そうか、どうなんだろうね」 Aさん：「だってさっき脚触った時、ピクッてしたもん」、Bさん：「え、そうなの？」 Aさん：「うん、したよ！まだ生きてるよ！寝てるだけだと思っよ」担任：「そっか、A君はまだ生きてるんじゃないかって思っんだね」 Aさんは黙って頷く。Bさん：「えー、死んでると思っんだけど…」

Eさん：「あのさ、死んでるかどうか、聞いてみたらいいんじゃない？ もう一匹チョウチョ捕まえてきてさ、『死んでますかー？』って聞いてもらうの」

担任：「…？ あ、このチョウチョはもう話せないから、話してもらうってこと？」

Eさん：「うん、そう。チョウチョ語で」

他の子ども：「あー！」「それいいね」などと賛同する子どもが数名いる。

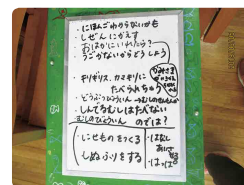
- ・Fさんが、「あのさ、僕、前に亀を飼ってたんだけど、その子が死んじゃってね、その時にはお医者さんに連れて行って、『はい、この子は死んでますよ』って確認してもらったの。だから**お医者さんに連れて行ってこの子が本当に死んでいるかどうか診てもらったらいいんじゃない**」と言うと、「あーなるほど」などと数名が賛同する。
- ・10数名は「えっ、それってできるの？」「虫のお医者さんってある？」などと、**新しい意見を聞いて疑問が湧き**発言している。
- ・担任は子どもたちから出る意見を受け入れ、ホワイトボードに書き写していく。「お墓に入れたら神様が生き返らせてくれるんだよ」「え、でもお墓に入れたら、**アリとかカマキリとかに食べられちゃうよ**」「**でも、死んでるって分かれば食べないでしょ**」「じゃあ偽物のチョウチョを作って飾っておけば、カマキリもこの子を食べないんじゃない？」などの声があがる。
- ・それぞれ、家で考えてくることになった。翌日の集まりの際に、話し合う。子どもたちから「虫の病院は無いつて言った！」「動物病院にとりあえず行くのがいいんじゃない？」「西千葉には無いつて！」などと家庭で話してきた子どもが口々に言う。Aさんが、「園長先生に教えてもらう！」と、意見を出したところ皆が賛成した。
- ・降園時の集まりでは、実物投影機でチョウチョの亡骸を大きく映す。皆じっと見つめる。「**青とオレンジがあったんだね**」「**やっぱり死んでる**」「**(風で揺らぐと)あ、今少し動いた！まだ生きてるんじゃない？**」などとそれぞれが発言する。

場面3：「やっぱり死んでるんだ…」6月上旬

- ・園長からは、「この蝶はミイラのように硬くなって、羽や足が折れやすくなっている、動かない、などの様子から、残念だけれどすでに死んでいること」、「生きてるか調べたい時には、ハアッと温かい息を吹きかけると調べられること」「**鱗粉という蝶にとって大事な粉は飛ぶために必要であること**」「**アリやカマキリは動いているものしか食べないこと**」「**お墓に埋めても、土の中にアリやカマキリがやってくることはないこと**」などを教えてもらった。
- ・その後、**チョウチョの亡骸を、そっと触ってみたり、ハアッと息を吹きかけ、「やっぱり死んでるんだ…」**などとつぶやいたりする子どもがいた。中には、少し離れた所から、不安そうにじっと見つめる子どももいた。担任は一人一人の様子に合わせて「そうだね、残念だけれど」と共感したり、じっと一緒に見つめたりしていった。

【考察】・A児という一人の子どもの虫への興味から始まった飼育であったが、その子どもの蝶との向き合い方を大切にすることで、友達、学級へと興味・関心が伝播し、皆の共通の話題となっていた。

- ・子どもたちの発言や考えを、一旦は担任が受け止めていくようにしたことで、自分なりに考えたことや感じたことを自由に発言できる雰囲気となり、子どもたちの豊かな発想につながっていた。
- ・蝶が身近な存在となり、A児にとってじっくりと関わることのできる環境であったことも、大切なポイントと考える。また、保育者のみならず、保護者や園長などを巻き込み、蝶という題材において子どもを中心に置きながらも、関わるヒトが多面的に広がっていったのも良かった。
- ・保育者が、子どもとその環境(モノ・コト)とが対峙し、自分なりに分ろう、受け止めようとしている姿を認めていくことで、子どもたちはいろいろな思考を巡らせ、自分事として言葉で表したり、主体的に行動したりすることができたのではないだろうか。
- ・蝶を擬人化したようなアイデア・イメージと、現実的な知識とが行き来する瞬間が何度もあった。それぞれの感性や創造性、試行錯誤の道のりは違うので、できる限り、一人一人が自分なりに感じたり考えたりしたことを表現しやすい雰囲気を作り、受け止めていくことが大切である。また、学級でホワイトボードや写真などの視覚教材を使ったり、話し合う場を設けたりしたりして、それぞれの気づきを共有したり振り返ったりする機会となるようにしたことも、子どもたちの次の行動や思いへとつながり、それぞれの深い学びへとつながっていった。



- ・毎日降園時に保護者にむけて、その日の保育やこれからの展望について話している。蝶のことも少しずつ伝えてきた。
- ・答えを教えるのではなく、子どもの発想を大事にしながら家庭でも共通の話題にして、子どもとの生活をともにくつづくことを楽しんでほしいことを伝えた。

- ・たくさん出てくる意見を一度は受け止める。
- ・全体に分かるように言葉を補いながら、整理していく。
- ・今までの流れや子どもたちの言葉を掲示し、振り返るきっかけとなるようにする。



- ・一人一人の「死」の受け止め方を見守ったり、共感したりしていく。